

若い頃の岡道男さん

1960年7月末、私は、当時京大西洋古典教室助手であった柳沼重剛さん(筑波大名誉教授、大妻女子大教授)とマインツ中央駅のプラットフォームにいた。このとき、私は、柳沼さんから、セント・アンドルーズの大学院学生寮で週何回風呂に入れるかを知るために学生たちの部屋をまわって "How often do you take a bath?" と聞き、彼らが風呂といっても朝起きぬけにシャワーを浴びるだけであることを知ったこと、その後一カ月ほどたって、アメリカ人留学生に「先日何回風呂に入るのか、と聞かれた時には、俺は臭っているのかとクンクンかいでみたほどだ」と苦情を言われたこと、そんな話(『語学者の散歩道』研究社出版、1991年、227頁)を聞いて大笑していた。柳沼さんは、セント・アンドルーズからロンドン、パリを経てマインツに私を訪れ、この後私と一緒にローマ、ギリシアをまわって日本に帰国する予定であった。ついでに言うと、同じ『語学者の散歩道』の「はじめて暮らした英国で驚いたこと」の中で柳沼さんが書いているローマのヴァチカン美術館のシスティナ聖堂見学での強烈な経験はこの帰国の途上のことで、柳沼さんに教えてもらって私もそれを見た。

話がはずみ、大学院時代の岡さんしか知らない柳沼さんが、学部時代の岡さんのことを聞いたので、「岡さんは、京大に入学してしばらくたったとき、英語の川田周雄先生(故人、京大教授、甲南大教授)に、自分は英語学を勉強したいんだが、と相談すると、川田先生は、京大は英語学を学ぶのにあまり適していない、それより古典語をやってみたらどうか、と松平千秋先生(京大名誉教授)を推薦してくださったので、二回生のときから松平先生の演習に出席するようになった、と言っていた」と私は語った。そして「その後、松平研究室に來られた川田先生にそのことを尋ねると、川田先生は『その通りだ』と述べられ、『私がテキストを忘れたとき、これを使ってください、と岡君が自分のテキストを貸してくれたのだが、そのテキストには何も書きこまれていないし、しかも、彼はいつも正確に訳しているのだから、びっくりした。岡君を見てみると、若い時分の松平さんを思いだすね』と強調された」ことを告げた。「ふうん」と感心した柳沼さんは、「1958年関西学院大で開催された日本西洋古典学会での岡さんの研究発表「英雄伝説として見たヘーラクレースの $\alpha\theta\lambda\omicron\iota$ の問題(『西洋古典学研究』Ⅶ号所収)で、高津春繁さん(故人、東大名誉教授)、杉勇さん(東京教育大名誉教授)や、久保正彰君(東大名誉教授、東北芸術工科大学長)のはげしい質問にも、一步も退かずに、堂々の論陣をはった素質は、

そのときから示されていたのだね」とうなずいていた。

私は、この柳沼さんの言葉を聞きながら、原納一富先生(故人・東北大助教授、当時大阪教育大助教授)が、京大での演習の後、出席学生たちと居酒屋で飲んだときのことを思いだしていた。竹部琳昌さん(同志社大教授)、新田博衛さん(京大名誉教授)、岡さん、私をはじめ他の学生たちも加わって、夜おそくまで原納先生を囲んでいた。翌日は朝一時限目(当時は朝8時から講義が始まっていた)から松平先生の演習があったのだが、この演習を休んだり、遅刻したりしたものが、私を含めて、多かった中で、岡さんだけは、遠い大阪近郊から定刻に出席していたのである。岡さんの還暦祝賀会の席上、西村賀子さん(市邨学園短大助教授)が、「岡先生は学会直後の月曜日も演習を休んでくださらない」と嘆いていた几帳面さ、自己にたいする厳格さは、学生時代からのものであった。

私がこのような想いにふけっている時、その想いを打ち破るかのように、ミュンヘン発の、ライン峡谷を北上する列車が入ってきた。止まった列車のタラップをチュービンゲンのシャーデヴァルト教授のもとに留学していた岡さんが下りてきた。半年前頭痛で苦しんでいた時とは打ってかわり、元気で明るくなった岡さんの姿がそこにあった。ひとまずホテルに到着き、マルク先生(故人、マインツ大名誉教授)とシュピラさん(マインツ大教授、当時マインツ大助手)を3人で訪問する段取りを決めると、ビアホールでビールを飲んで久闊を叙した。推理小説好きの柳沼さんと岡さんは、自分の読んだ推理小説の情報交換を始めた。見違えるほど健康になった岡さんは、独訳で読んだイギリスの推理小説をさかんに批評していた。

この岡さんが、マルク先生とシュピラさんの前に現われたことで、その後の岡さんのみならず、松平先生および京大西洋古典研究室とマインツ大西洋古典研究室との縁が深くなったのである。マルク先生は、その頃マインツにいたシャーデヴァルト教授の娘婿ホルデラーさんからすでに岡さんのことを聞き、関心をもっておられたが、岡さんに会い、直接話をして、そのすぐれた資質と豊かな知識に感銘をうけられ、強く岡さんに惹きつけられたのである。そして、マルク先生は、柳沼さんと私が帰国した後一年たつと、ついに、シュピラさんと相談して、岡さんをチュービンゲンからマインツに呼び寄せられたのである。

岡さんの帰国後は、まず松平先生がマインツ大の客員教授になられ、その後、岡さんが二度マインツ大の客員教授になり、さらにもう一度文部省の在外研究員としてマインツ大に席をおいている。そのほか竹部さん、内田次信さん(光

華女子大教授)がマインツ大にお世話になっているし、私ももう一度マインツに滞在している。また、京大西洋古典研究室の関係からは、金山(旧姓今林)万里子さん(大阪医大教授)、中山恒夫さん(筑波大教授)がマインツ大に留学している。この間、マインツ大からは、シュピラさんが二度京都に来ているのである。マルク先生にお目にかかった翌日、柳沼さんと私の二人は、岡さんとマインツの駅でわかれた。

マインツから1962年に帰国した岡さんは、その4月から同志社大に専任講師として勤務し、ドイツ語、西洋古典語を担当し、西洋古典文学も講義した。その頃、私も、同志社大に籍があり、岡さんを同僚として迎え、心強く思っていた。岡さんは、学生たちを厳しく、しかも暖く指導したから、学生たちに尊敬され、慕われていた。結婚する教え子から仲人さえ依頼されたりしたのである。さらに、岡さんは、同志社大の若手教員から頼まれて、ラテン語を教えたり、チュービンゲン大やマインツ大に留学を希望する教員に親切な助言をしていたので、教員間で非常に人望があった。また、野村胡堂基金でチュービンゲン大から来日したジーベト教授が、同志社大で「ドイツの大学制度について」の講演をしたことがあったが、その際の見事な通訳は評判になった。

その後しばらくの間は同志社大への受験生が激増した時期で、入試を取り仕切っていた入試実行委員会とその事務局は、悪戦苦闘していた。そして、ある時、事務局の手違いが、入試の監督者や採点委員を怒らせるということがあった。しかも、このことが、入試実行委員と事務局の対立を招き、事務局が責任をとらない限り、業務につかないという者が出てきて、険悪な雰囲気になった。その時、実行委員の一人であった岡さんが、「今は、何よりも入試を完了させることが肝要で、責任うんぬんのことは、後から問題にすればよいではないか」と言って、さっさと自分の分担の仕事を片付けていったので、それにひきずられて他の委員も仕事をはじめ、強硬だった連中も止むなくこれに従った。この結果、入試も無事終了、不思議なことに、この間に対立もなくなり、責任問題は消えてなくなってしまった。入試実行委員長と事務局は岡さんに深く感謝したということで、私はこのことを当事者から聞いて知っている。一旦引き受けた以上は、不都合があっても、まず自分のなすべきことはなしたうえで、ものごとを解決する態度、あるいは人の過ちにつけこんで人を責めるということをしてはいけないという人間味は、岡さんの終生かわらぬところである。

1969年7月から私は二度目のマインツ滞在をしていた。そして、その9月にギリシアのデルフィを中心に「国際人文学会」が開催され、マルク先生と私はド

イツから参加した。松平先生も日本からこの学会に直接参加された。松平先生と私は前夜祭のあったアテネで合流し、同じホテルの同じ部屋に宿泊することになった。

1969年といえば、大学紛争が収まり始めた年であったが、日本でもヨーロッパでも紛争の勢いはまだ衰えていなかった。とりわけ、京大文学部は大学内ではまだ授業ができず、西洋古典研究室も、松平先生が、旧宅(北白川西瀬の内町)近くに部屋を確保され、授業をしておられた。そして、松平先生とその年の4月から助教授として京大文学部に移った岡さんが、共同して紛争に対処しながら、何よりも大切な授業を絶やされなかったのである。松平先生と岡さんは、紛争学生との妥協を一切排して、学問の中立と純粋を守る立場を堅持された。このお二人の、特に松平先生の態度は、紛争当時委員長として作成された「文学部改革草案」の冒頭において、「文学部は文科創造の『協同体』であり、その学問は『虚学』を重んずる精神に基礎をおくことを明記」され(中久郎「臼井二尚先生と私」、『以文』34号平成3年10月)、この理念に拠って「団交」にむかわれたことに、もっともよく現われているだろう。

日本からアテネへの長路の飛行機旅行に疲れておられた松平先生は、ベッドに横になりながらも、元気なお声で、文学部の様子を語られ、私も、同僚の手紙による情報から、当時の同志社大の事情を述べた。このあと、岡さんのことに話がおよび、先生は、「御輿(員三、京大名誉教授、当時文学部長)君が、業績審査の際、岡君の論文『英雄伝説として見たヘーラクレースの $\alpha\theta\lambda\omicron\iota$ の問題』を激賞していた。御輿君がギリシアへ行ったらよいと言ってくれるし、岡君も学生たちを親身になって世話してくれるので、安心して来られたんだ」と言っておられた。このような話をしているうちに、先生は、お疲れになったのか、静かに寝いってしまわれた。私も、紛争で団交の洗礼を受けて以来体調をくずし、ヨーロッパでは食欲がなく、松平先生にも御心配をおかけしたのだが、その時は、先生とは逆に、疲れのためにかえって頭が冴え、なかなか寝つかれなかった。そして、「学問は純粋であるべきだが、学問の純粋さは学問を担う人次第なのだ」と、政治的に行動する人たちを批判して、私に語った岡さんの言葉が、いつまでも頭から離れなかった。翌年、松平先生は文学部長になられ、文学部の難局を乗りきられたのであるが、これには岡さんの学問にたいする真摯な態度と学生諸君へのきめこまかい、温かい配慮も寄与していた、と私は推測するのである。

岡さんとの長い付き合いにおいては、私は、いつも一方的に教えられるばかり

りであった，と言っても過言ではない．岡さんが京大に移ってからのことは，岡さんの指導を受けた中務哲郎さん(京大助教授)を始めとする多くのすぐれた人たちが，私の知らない多くの素晴らしいことを知っているだろう．それらを記してくれる機会のはやく来ることを楽しみにしながらペンを置くことにしよう．

1993年11月16日

松 本 仁 助